至誠沈勇

米内光政会会報　第四号



写真提供：盛岡市先人記念館

目　次

令和六年度（第五回）総会報告 …… 米内光政会編集部　1

米内光政をめぐる人々Ⅳ　米内光政の恩師・冨田小一郎 …… 米内光政会会長　藤井　茂　2

米内光政とその周辺④　郷里の海軍の先輩、温厚な人格者 …… 米内光政会編集部　8

ゆかりの地・人の紹介　米内光政閣下と父中野誠之助 …… 米内光政会　中野　孝之助　10

年次事業実施状況 ……　12

■令和六年度（第五回）総会報告

米内光政会編集部

米内光政会第五回総会は、令和六年四月二十日（土）に、米内光政閣下菩提寺の紫雲山円光寺において開催しました。当日は米内閣下のご命日であり、総会に先立ち、本堂で七十七回忌の法要を営みました。多くの会員の皆様にご参列を賜り、深く感謝申し上げます。

総会では、令和五年度の第四回総会を書面議決で実施したこと。今回から毎年秋に開催していた総会を、春の開催に時期を移すこと。また、役員の改選時期を迎え、会長、監事の再任と空席になっていた副会長の新任人事について、了承されました。

理事・顧問は、新たなメンバーを加え充実した布陣で進めていくことになりました。決算、予算を含めすべての議事事項は承認いただきました。

総会終了後、藤井茂会長が、「米内光政と恩師富田小一郎」と題した講演を行いました。様々なエピソードが織り込まれた内容と温かい師弟のつながりに、参加者の皆さんは深い感銘を覚えたとの感想がありました。

最後に、旧日本海軍で食べられていた海軍カレーのお振舞いがあり、皆さん満足の表情で、会場を後にされました。

新役員名簿

	氏名	所属	役職	
会長	藤井　茂	（一財）新渡戸基金	理事長	再任
副会長	鎌田　英樹	㈱ＩＢＣ岩手放送	代表取締役会長	新任
監事	内藤　隆	岩手県郷友会	会長	再任
理事	菊田　隆	盛岡市議会	議員	再任
理事	村田　芳三	盛岡市議会	議員	新任
理事	竹田　浩久	盛岡市議会	議員	新任
理事	工藤　健一	盛岡市議会	議員	新任
理事	赤坂　栄	（一社）利他の心	代表理事	新任
理事	柏　眞喜子	東北公営企業㈱	代表取締役社長	新任
顧問	玉澤徳一郎	元農林水産大臣		再任
顧問	谷藤　裕明	前盛岡市長		新任
事務局	柏村　文成　・　中野孝之助　・　八重畑龍一			

敬称略

■米内光政をめぐる人々　Ⅳ

米内光政の恩師・冨田小一郎

米内光政会会長　藤井　茂

旧師の恩、生涯忘れず

昭和十四年（一九三九）六月三日、東京は赤坂の料亭幸楽。この日、今は功成り名を遂げた盛岡中学校（現盛岡第一高等学校）の卒業生たちは、同校の名物教師だった冨田小一郎を招いていた。明治三十年前後、彼らの共通の恩師だったからである。

教科は数学。かつて東京大学選科を出た冨田は、数学を教えるために再び勉強し直し、資格をとって教えていた。その教え方は、けっして上手ではなかったが、熱誠だけは誰よりもあった。人一倍厳しく、どしどしと落第させている。おそらく、盛岡中学校の歴史で、冨田ほど落第させた教師はいなかったはずで、あまりに厳しかったので、学校でも問題になりかけたことがあったくらいだった。

入学時に約二百名だった生徒が、まともに五年で卒業できるのは、いつも三分の二ほどであった。それだけに、落第しなかった生徒たちの質は高かったのである。

こんな例があった。あるときビリで終えた生徒が第二高等学校医科に合格した。現在の東北大学医学部である。落第しないで五年間を通すこと自体が、それほどの程度の高さだったのである。

その冨田だが、米内を落第させたわけではない。それよりも落第させないために頑張ったのである。米内の場合は、点数ではなく学費の問題だった。米内の父受政（ながまさ）は、明治二十二年（一八八九）五月の市長選で最高得票を獲得したにもかかわらず時の知事から横やりを入れられ、米内が九歳ぐらいのときから東京へ出奔していた。そのため、米内家の生活は母トミの針仕事でしのがざるをえなかったのである。

成績が良かったから盛岡中学校に入学はしたものの、学費はいつもぎりぎりで、それだけに、上級学校への進学を考えると、相当に困難なことが予想された。

そういう一家の事情もあって、米内は在校中に一度、授業料滞納者として名前を貼り出されたことがある。そのとき、彼を救ったのが教師の冨田小一郎だった。冨田家には小一郎の小遣帳が残っていて、この一件以後、米内に毎月の授業料といくらか生活に足しになる金額（二円）をあげていたことが判明している。冨田は、ヒデという婆やに頼み、そのころ八幡町坂上に住んでいた米内家に届けさせていた。

だから、米内は金のかからない海軍兵学校に進み、そこを終えたのである（そこには、日清・日露という時代の要請と、それに伴う盛岡中学校内での軍人熱もあった）。そんな米内だったから、盛岡中学校時代の冨田からの恩は、卒業後

もずっと忘れることはなかった。海軍での位階が上がっていっても、それはまったく同じだった。

冨田もまた、米内の海軍での地位が上昇していくのを目を細めて見守っていた。鉞（まさかり）のような鈍重な米内を、郷里で期待しながら暮らしていたのである。

じつは冨田は、米内が卒業したあと盛岡中学校のストライキに会い、辞めて三陸沿岸で漁業生活を経験し、散々な目にあったあと、救う人があって盛岡に戻って盛岡女子商業学校（現盛岡市立高校）の校長をしていた。

一方の米内は、昭和十二年（一九三七）、海軍大臣とともに海軍大将にもなり、ついに十五年（一九四〇）一月には総理大臣にまでのぼりつめた。

それから一年余りのちの十六年（一九四一）四月、盛岡に帰省した折、米内は冨田小一郎が校長をしていた盛岡女子商業学校を訪問した（同年一月に亡くなった夫人の埋骨式のための帰省だった）。その時の写真が冨田家に残されている。昨年まで総理大臣だった米内光政が来校するというので、全校の女生徒たちが校門に出迎えた。米内が校門を入って来たのに対し、こちらでは冨田校長が出迎え、二人はぐんぐんと歩み寄って、ついには握手をするというシーンである。それはまるで映画の一シーンのような光景だった。

女生徒たちは、郷土の偉人米内光政を自分らの学校で迎えようとは思いもしなかったに違いない。それが間近に見ることができたのである。おそらく女生徒たちは、その日、興奮



昭和16年４月に盛岡に帰省した折、冨田小一郎が校長をしていた盛岡女子商業学校を訪問した。
手前の背中が見えている冨田が米内を出迎えた。にこやかな米内の表情が印象的である。

冷めやらぬ思いをいだいて家に帰り、父母らに伝えたことだろう。

普段は、それほど偉いとも思っていなかった五尺あるかないかの自分たちの校長が、今を時めく米内光政の恩師だったことを知り、あらためて驚いたに違いない。

先輩の義侠心に救われる

米内の授業料滞納に関して記したとき、助けてくれた教師として冨田小一郎をあげたが、じつはそのとき間に入ったのは、高藤（たかふじ）太一郎という生徒だった。高藤は米内の三級先輩で、五年の級長だった。その彼が、学校の掲示板の前を通ったら、米内の名が張り出されており、当の本人米内もそこにいて周囲の連中に冷やかされていた。それを見た高藤は、「なんだ、なんだ、これぐらいのことで騒ぐんじゃない」と、集まっていた生徒たちを蹴散らしたのである。

高藤の偉いところは、このあとの行動だった。それから間もないある日の学校の帰り、五年担当の冨田先生宅を訪ねた。生徒の躾にめっぽうやかましい冨田は、もちろん高藤を家にあげることなどせず、どんな生徒にも「用事があるなら玄関で言いなさい」ということだった。

それを知っていた高藤は、玄関で冨田先生に米内の窮状を訴えた。

「家庭から渡された授業料を使い込んで納付していないというのなら、掲示して他の生徒たちの見せしめとするのもいいでしょう。しかし、家庭の事情によって滞納せざるを得ない者まで同列に扱うということは、教育者としていかがなものでありましょう?」と、理路整然と談判したのである。

これには、校内一やかまし屋の冨田も、うなってしまった。高藤の義侠心に富んだ訴えに冨田も納得し、翌日さっそく掲示板から米内の名前は消されたのである。

親身な上級生高藤の好意に感激した米内はその後、海軍に入り昇進したり勤務先が変わったりしたときには、いつも高藤に消息を伝えることを忘れなかった。

米内が海軍大臣に就任した時というので、おそらく昭和十二年（一九三七）二月のことだろう。

「今日は親任式がありましたので、先に宮中の陛下をお訪ねしなければならず、このような格好でご報告にまいりました」と、宮中に参内したままの金ぴかの正装で高藤の家の玄関をくぐってきた。応対に出た女中さんは、ひと目見て海軍高官の立派な服装をした米内の姿に、目を丸くして驚いたという。

じつは高藤は、盛岡中学校の生徒のとき海軍の志望だったが、極度に目が悪かったため志望を変更せざるを得ず、東京高等師範学校（現筑波大学）へ進んだ。そこを卒業したあと、茨城や三重、和歌山の師範学校長を歴任し関東大震災後の大正十三年（一九二四）、東京府立第二中学校（現都立上野高校）の初代校長についた。この学校に高藤は、約二十年の長きにわたってつとめている。



昭和14年春。赤坂の料亭幸楽にて。米内光政、板垣征四郎など盛岡中学卒業生50人ほどが集まり、冨田小一郎先生を東京に招いた。

盛岡中学校卒業生たちの総意で、恩師の冨田先生を東京にお招きしようということになり、冒頭の赤坂の幸楽に五十人ほど集まったのは、正装した米内の突然の訪問を高藤が受けた二年後の春のことで、そのなかに高藤が交じっていたのは勿論のことである。

当日の中心は冨田小一郎だったから冨田が前列中央に座っているのは納得するが、その冨田は小柄なものだから、右にどっかりと腰を据えている田中舘愛橘（二戸市出身。日本の物理学の草分け）のほうが中心人物のように受け取られかねないほど貫録がある。

米内は、今をときめく海軍大臣だったから、その田中舘の右横にゆったりと陣取っていてほほ笑ましいのだが、冨田の左横には、これも今をときめく陸軍大臣板垣征四郎が端然と座っている。つまり、冨田はそのころ海軍と陸軍とを牛耳っていた二人の大臣の恩師でもあったのである。だから、翌日の東都の新聞には、冨田を囲んでの盛岡中学校卒業生たちの会を「日本一幸福な先生―教え子は陸海両相以下名士揃い」などと、かつての恩師冨田に対し過分なほどの表現で紙面を飾っているのである。

高藤は二列目左から五人目に立っていて、彼もまた満面の笑みを浮かべている。この会の折、高藤には盛岡中学校時代の恩師冨田のもとを訪ねたことや、掲示板の前での米内の照れくさそうな表情、数日のちに冨田の家を訪れて米内の窮状を訴えたことなどが走馬灯のようによぎったことだろう。し

かし恩師の冨田も、救った高藤も、救われた米内も、お互いそんなことをまるで忘れたかのように、その会をじつに楽しそうに過ごしているように見える。

二転三転した胸像

冨田は盛岡市立高等学校（盛岡市上太田）と盛岡商業高等学校（盛岡市本宮）の二つの高等学校の創立者と言われている。しかし現在、冨田小一郎の胸像は、前者の盛岡市立高校の校庭にあるだけである。

それを見ると、「冨田老先生之像」「米内光政謹書」と記されているので、米内の筆になったことがわかる。米内は盛岡市立高校の卒業生ではないにもかかわらず、なぜ彼が「謹書」した胸像が同校に建っているのかは、同校の創立者冨田先生との強い絆からだった。

前述したように、冨田はかつて明治二十年代半ばから三十年代初めにかけて盛岡中学（現盛岡第一高等学校）に勤めたが、そのときの代表的な教え子が米内だったのである。まして米内は、冨田の懐からの出資で盛岡中学を終え、名を成した人だったから、今をときめく彼に揮毫の役がまわってきたのも当然と言えば当然だった。

胸像の除幕式は昭和十一年（一九三六）六月二十一日におこなわれたが、おそらく前の年から米内にその揮毫の打診はされていたはずである。というのは、米内は当時、佐世保鎮守府司令長官から横須賀鎮守府司令長官になるころだったから、冨田の教え子として胸像の題字を頼まれるのに打ってつけの地位であったといえる。その字体は枯淡で、盛岡市先人記念館にある字体とほぼ変わらない。米内は、なにも書の練習を積んだわけではないようだが、その書体は体格の割には細心なように見受けられる。慎重な性格なのだろう。

その米内が、それから間もなく盛岡を訪れたとき、その胸像を拝見しに学校まで出向いたことがあった。そこで、記念に胸像の前で冨田先生と二人で写真に収まっている。冨田は椅子にちょこんと座り、その左に米内が堂々たる体躯で立っているのだが、麗しき師弟の見本みたいな写真といってもいいだろう。

その胸像が建って七年後の昭和十八年（一九四三）五月二十二日、国に献納され太平洋戦争で使われることになった。戦時体制に入り戦争一色になったこの年、その遂行のためには国民がみな一致団結して協力していかなければならないということで、兵器となる全国の金属が供出されたのだが、冨田の胸像もそれに該当したのである。はずされて運ばれていったとき、学校関係者はどんな感慨をもって見送ったのだろう。お国のためとはいえ、内心忸怩（じくじ）たるものを感じたのではないだろうか。

大規模な金属供出はそれから一年もたたない昭和十九年（一九四四）春にもおこなわれた。大多数の国民はそれに従ったが、なかには従わず、夜のうちに運んで某所へ隠し、戦後にぽっと出て来て、同じところに置かれたなどという

ケースもあったと聞く。

冨田の胸像は、盛岡市民の従順な気質通り運ばれていったのだが、戦後になり世の中に平和が蘇ってきた昭和三十五年（一九六〇）十一月二日、盛岡市立高校に再び建てられた。それは文化の日の前日で、教育に尽くし人を育てた冨田に似つかわしい日であった。その日は、小一郎の孫娘の冨田（現戸田）洋子さんが除幕をしたと聞いている。

冨田の胸像に関して、同校の卒業生の何人かに尋ねたことがあるが、在学中、それを仰ぎ見ることはほとんどなかったらしく、多くは「そういえば、あったような気もしますが…」との回答だった。それから考えるに、盛岡市立高校では三年間、学校の祖ともいえる冨田小一郎のことに触れることはほとんどないようだ。同校は創立の経過が市内の普通の高校とは違っているし、そこの創立者である冨田小一郎という人もまた、盛岡を代表する教育者なので、その彼の生涯や心意気、人徳、人助けなどはしっかりと教えたいものだ。そういう冨田の育英や人思いを伝えていくことは、何にもまして人間づくりに重要だと思われるのだが、現在は各学校とも、そういうことにはあまり一生懸命ではないようだ。



米内光政と恩師冨田小一郎
冨田先生の胸像の前で。

冨田は現在、先人記念館百三十人の先人の一人として顕彰されているので、是非とも、こういう人物の生き様を感動をもって教えたいものだが、そういう教育は消え去りつつあるようだ。

（本文は『いわて人物夜話』の「米内光政」と「冨田小一郎」の項を合わせ、加筆修正したものである）

■米内光政とその周辺④

郷里の海軍の先輩、温厚な人格者

昭和十五年（一九四〇）九月十日、まだ残暑の厳しいその日に山屋他人（盛岡出身の海軍大将）は亡くなった。郷里の新聞は「山屋戦術の創始者」とか「惜しい人を…」という見出しで、山屋の死去を大きく取り上げた。葬儀委員長は、二か月前まで総理大臣だった米内光政だった。郷里の海軍の後輩でもあったからだ。

米内は明治十三年（一八八〇）三月の生まれだから、慶応二年（一八六六）三月生まれの山屋とは十四歳も違うので、ほぼ一世代の隔たりがあった。



海軍大将　山屋他人

米内は元来、何事も慎重で、どっしりと構えているので、あるときは鈍重などと言われたが、そうではなく思慮深い人だった。だから、山屋のことを、同じ道を歩んだ郷里の先輩と知ってはいたが、自ら足繁く訪ねるなどということはしなかった。

「私は元来、人を訪問することが好きではないので、郷土の大先輩たる山屋閣下も、あまりお訪ねしたことがなかった。なんでも私の大尉時代に、八角（三郎）、原（敢二郎）、小山田（繁蔵）の諸君に連れられて、当時たしか麻布の狸穴（まみあな）近くだったかと記憶する山屋閣下をお訪ねして、ご馳走になったことがあるが、これが私の閣下にお目にかかった最初だったように憶えている」

文中の八角、原、小山田はみな郷土出身で、米内と同じころ海軍に進んだ人たちだが、その連中に連れられて米内は山屋の家を訪ねたのだろう。大尉時代というので、明治四十年代のことと思われる。

その時の、またはそれ以後の山屋についての米内の印象は次のようなものだった。

「山屋閣下は温厚な人格者で、慈父のような尊厳のある方だったが、けっして単にそれだけではなく、かなりの閃（ひらめ）きをもったユーモリストでもあられた。人を導くのに、けっして理屈をもってすることなく、笑い話の諧謔（かいぎゃく）の中に、おのがじし、その行くべき道を示されるというふうであった」

山屋が海軍内で「君子人」とか「人格者」とかいう評判が立ったのは、米内も言うように、「理屈」でもって人を諭すのではなく、「諧謔」の中に「行くべき道を示される」という「慈父のような尊厳」に満ちていたからだ。人を良い方向へ導くコツを心得ていた人であったことがわかる。だから、米内が林銑十郎内閣の海軍大臣に就任した昭和十二年（一九三七）二月、山屋のお宅に挨拶に伺った時、言葉少なに「この際、ご苦労だね」と言っただけで、政治上の意見などは一切言わなかったという。

その後、米内が大命を拝した昭和十五年（一九四〇）一月、岩手海軍会でお祝いの会を開いたが、そのころ山屋は既に病床に臥せていたので出席がかなわず、その代わり挨拶の原稿を三時間もかかって書き、それを小森吉助（昭和初期、海軍少将で退役）が代読している。

のちに米内は小森からその原稿を譲られたが、その原稿があまりにも素晴らしいので、それを表装して家宝にしたいと語っているほどである。

米内は、山屋の病状を風の便りで聞き、山屋の亡くなる一週間ほど前（昭和十五年九月上旬）にお見舞いに伺ったが、だいぶ弱っていてお気の毒だったと述べている。帰宅してからお見舞いの手紙を山屋の妻貞子に送ったが、その手紙はちょうど山屋が亡くなった日に届いている。のちに米内はそれを打ち明けられ、感慨無量だったと述べている。

米内の山屋への思いは、次の言葉に尽きるだろう。

「山屋閣下は、あれだけの人材であられたのだから、定め し政治上とかその他の誘いもあったに相違ないが、…終始一貫いっさい政治上のことに関係されずに七十五の清い生涯を帝国軍人としてのみ終えられたことは、さすがにお偉かったと欽慕の情に堪えないと同時に、まことにお羨ましくさえ思われる」

確かに、山屋が亡くなって一年余りのちの昭和十六年（一九四一）十二月上旬、日本は太平洋戦争に突入した。それを阻止することができずに進んでいったのは米内の時代だった。だから山屋は日本の敗戦を見ることなく、すべての戦いで勝利した経験だけを味わった人だった。

一方、米内は敗戦の処理をし、敗戦後も戦争で傷ついた多くの遺族を慰問し、戦後三年もたたない昭和二十三年（一九四八）春に亡くなった。生まれた時代が十数年違うというだけで、こんなにも違った結果になるということに、歴史の皮肉を感じてしまうのである。

（本文は『いわて人物夜話』の「山屋他人」の項を加筆訂正したものである）

米内光政会編集部

■ゆかりの地・人の紹介

米内光政閣下と父中野誠之助

米内光政会　中野　孝之助

今年で、米内光政会が再発足して五年が経ちます。以前の米内光政会は岩手日報に事務局を置き、長く会を運営されてきましたが、諸般の事情により、会を解散することになりました。平成二十三年のことです。

父中野誠之助と私は、毎年四月二十日の米内閣下の命日には円光寺を訪れ、墓前に花を手向け閣下の偉業に想いを致すことが、長らくの習慣になっていました。会の解散を聞いてからは、墓に花を手向ける人が年々少なくなっているように感じ、どうしたものかと父からことあるごとに話が出ていました。

私は幼いころから、米内閣下を信奉する父の姿を見てきました。そしてある時父が、米内閣下に盛岡の街中でお会いした時のことを話してくれました。その時に「これからの日本を創るのはあなた方若い人たちです。頑張ってください。」と声を掛けられたとのことです。昭和二十二年のことのようです。

その言葉を心にいただきながら、生きてきたとのことです。そんな中、平成三十年に、米内閣下の曾孫である米内紘正

米内光政忌追悼会発起人挨拶

只今ご紹介をいただきました、中野誠之助でございます。

本日の会の発起人を代表し一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、何かとご多端の中、米内光政閣下の追悼の会にお集まりをいただき、心より篤く御礼を申し上げます。

平成の御代が閉じる節目の時にあって、先の大戦の終結に昭和天皇のご信認を受け、終戦にご尽力され日本を救われた米内閣下を、皆様と共に追悼申し上げたく、ご案内を差し上げましたところ、このように多くの皆様のご賛意を賜り、米内閣下も喜ばれていることと存ずるものであります。

また、本日、皆様のお手元に、米内閣下の小冊子をお届けしております。

これは、盛岡の先人のおひとり、中国金石学の世界的権威である太田孝太郎先生が、盛岡市史の中で米内閣下の人物評を書かれたものを概略抜粋したものでございます。米内光政会がまとめた年譜も併せて掲載しております。

さて、私事を申し上げれば、昭和二十二年の初夏のころだったと思います。盛岡市内の、上衆小路のバス停で

氏が盛岡へやって来ました。きっかけが欲しいと思っていた父は、すぐに翌年の米内閣下の命日に追悼会を開催し、機運を盛り上げて、新たな米内光政会を立ち上げることを私に告げました。

米内紘正氏や心ある方々と御相談し、平成三十一年四月二十日に開催した追悼会の時の追悼の言葉を申し述べる父の姿は、若き日に米内閣下からお声を掛けていただいたその御恩に報いたいという気持ちで溢れていたと思います。この時父は齢九十六歳。人生最後の仕事に巡り合ったと思っていたようです。この時のことを思うたびに、人の世の縁を感じずにはいられません。

令和二年の秋に新たな米内光政会を設立し、すでに五回の総会を開催し、運営も軌道に乗り始めたと思います。盛岡が生んだ偉人米内光政閣下の遺徳を、末永く顕彰できることを皆様とともに祈念しております。



左に立って挨拶を述べる中野誠之助

米内閣下に偶然にお会いいたしました。御友人お二人とご一緒にバスをお待ちのようでした。

私も旧軍人でありました事から、居住まいを正し、ご挨拶を申し上げましたところ、閣下はわずかに微笑みながら、「これからの日本をつくっていくのは、若いあなた方です。ぜひ頑張ってください。」と激励のお言葉を頂戴したその時のことが、昨日のことのように思い出されます。このお言葉を励みに、今日まで生きてきたといっても過言ではございません。

盛岡には、米内閣下の遺徳を語り継ぐ「米内光政会」が存在し、活発に活動をされてきました。残念ながら諸般の事情で、現在は活動を休止されていると伺っております。長らくこのことが心に引っかかっておりました。

本日は、大きな時代の区切りの中で、今ある平和をかみしめ、米内光政閣下のご人徳を偲び、皆様でご追悼申し上げたく存じます。

以上、発起人を代表し、ご挨拶とさせていただきます。

本日は、誠に有難うございます。

平成三十一年四月二十日

米内光政忌追悼会（ついとうえ）発起人代表

自衛隊協力会岩手県連合会

名誉会長　中野　誠之助





円光寺での七十七回忌法要の様子（令和６年４月20日）



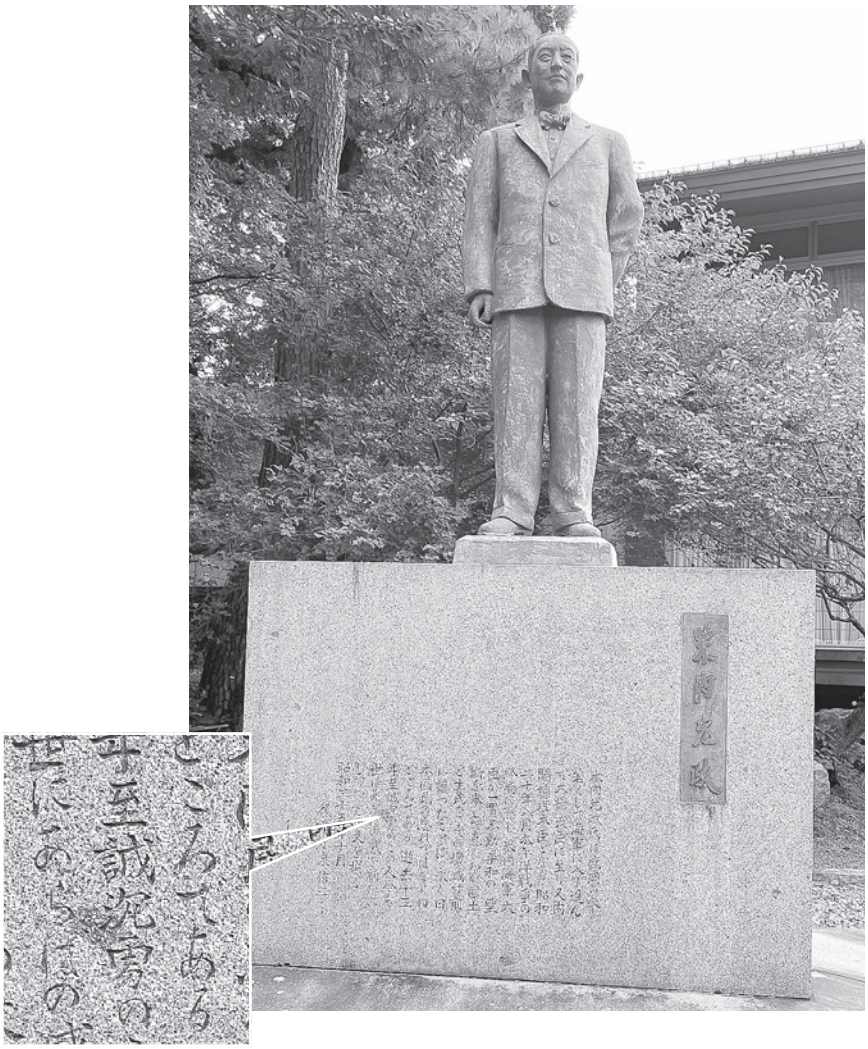
遺族代表で挨拶をする曾孫の米内紘正氏（令和６年４月20日）



盛岡八幡宮境内にある米内光政閣下銅像の清掃風景（令和６年４月15日）

表題「至誠沈勇」について

「至誠沈勇」とは、「この上なく誠実で、落ち着いて勇気のある様」を意味する米内光政の人柄を表わしたもの。盛岡八幡宮境内にある崇敬殿前の米内光政像の台座に刻まれた経済学者（慶応義塾大学塾長）小泉信三による撰文より抜粋したもので、銅像の除幕式は昭和三十五年（一九六〇）十月十日に行われた。



米内光政会会報（四号）非売品

令和六年十二月二十五日発行

発行所　米内光政会事務局

〒〇二〇―〇八八五

岩手県盛岡市紺屋町四―二十四

印刷所　河北印刷株式会社

盛岡市本町通二丁目八―七

令和6年12月